神社参拝案内図

・安芸地区　・一志地区　・津地区　・久居地区

令和7年2月1日
編集　三重県神社庁教化委員会中勢地区教化委員
発行　三重県神社庁教化委員会
印刷　伊藤印刷株式会社

安芸地区（二十六社）

①御祭神名　②住所　③電話番号

❶ 上野神社（うえの）
①譽田別尊　外二十柱　②津市河芸町上野三一六三　③〇五九－二四五－一五五二

創立年代不詳も、社殿造替の最も古い棟札は応年十三年とあり、五百年以上の歴史がある。永禄年間、織田信長公より太刀鎧等が奉納される。伊勢の国司、北畠氏の祈願社として奉祀されたと伝えられている。

ろ-5

❷ 服織神社（はとり）
①大日靈貴尊　外五柱　②津市河芸町久知野一七八一　③〇五九－二四五－一五五二（①上野神社兼用）

創立不詳も、明治四十一年四月、上野神社へ合祀される。その後、里人達の強い希望により、昭和三年にお旅所を建設、昭和二十六年三月十五日、神社本庁統理の承認を受け服織神社を創立した。

ろ-5

❸ 尾前神社（おざき）
①速佐須良比咩神　外三柱　②津市河芸町東千里七五九　③なし

当社は延喜式内社で、千里ヶ丘中尾前に建てられていたが鎌倉時代後期に現在地に移った。天武天皇より「尾前土宮」の宮号を賜り、また後鳥羽天皇より「奄藝祓所」の称号を受ける。獅子舞は津市民族無形文化財に指定。

ろ-5

❹ 春日神社（かすが）
①天児屋根命　外四柱　②津市河芸町西千里一五三三　③なし

奈良、春日大社の分霊を祀る。明治四十一年、尾前神社へ合祀されるが、昭和二年に尾前神社から分祀し現在地に社殿を建立。尾前神社に合祀されてあった八雲神社、菅原神社、金刀比羅神社、山神社も分祀して当社に合祀。

ろ-5

❺ 彌尼布理神社（みにふり）
①稲倉魂命　外九柱　②津市河芸町大字北黒田三三五〇　③なし

平城天皇の御代、大同元年（八〇六年）に東海道観察使が彌尼神社を創建。文禄年間に一時荒廃も、藤堂高次の寄進で再興。明治十二年の造営時、瑞垣内に四種の稲が自生した。通称いねふりさんとして親しまれている。

ろ-5

❻ 黒田神社（くろだ）
①天忍穂耳尊　外二十四柱　②津市河芸町南黒田一六四九　③〇五九－二四五－一五五二（①上野神社兼用）

古くから南黒田の産土神として尊崇を集めてきた。正一位日天八王子大明神と称えて祀られた祠を基とする。著名な六ヶ所の神を合わせ祀ったが、明治四十一年四月、黒田神社と単称した。

ろ-5

❼ 三行神社（みゆき）
①國狭槌尊　外十一柱　②津市河芸町三行二六三　③〇五九－二四五－一五五二（①上野神社兼用）

牛頭天王社、若宮八幡宮、住吉大明神社、富士権現社の四社、小祠三祠を合祀して、三行神社と単称した。明治四十年九月二十七日の事である。

ろ-5

❽ 宇氣比神社（うきひ）
①五男三女神　外四柱　②津市河芸町浜田三三三　③〇五九－二四五－一五五二（①上野神社兼用）

約九百年前、八王子宮を建て、五穀豊穣を祈った。後、廃れ、大工の善太郎が社殿を造替。以来十三回の造替に及び、今日の社殿は明治二十四年三月の建立。明治三十九年十月に宇氣比神社と改称。

ろ-5

❾ 八雲神社（やくも）
①素盞嗚命　外五柱　②津市河芸町赤部一九八　③〇五九－二四五－一五五二（①上野神社兼用）

創立年不詳も、八雲、宇気比を奉斎していた。以来、七百年の間に十数回に及び社殿を造替。明治三十三年、更に荘厳な社殿を建立して合祀正遷宮を奉仕し社号を八雲神社と改称した。

ろ-5

❿ 事忌神社（こといみ）
①多紀理毘賣命　外十柱　②津市河芸町高佐五七九　③〇五九－二四五－一五五二（①上野神社兼用）

創立不詳も、明治四年以前まで八王子大明神として崇敬厚い社であった。明治四年、宇氣比神社と改称、明治四十年、更に称を改め、事忌神社とした。かつては、旧正月十一日、弓矢神事を奉納していた。

ろ-5

⓫ 八雲神社（やくも）
①須佐之男命　外二柱　②津市河芸町中別保一八七四　③なし

天正年間、上野城主の織田氏を慕う野島精次郎が領主となり牛頭天王を勧請したのが当社の始まりと伝わる。紀州藩主より「社領三石之宮地」の寄進を受ける。明治四十一年十月十三日に、伊奈利社二社と山神五社を合祀。

ろ-5

⓬ 八雲神社（やくも）
①須佐之男命　外二柱　②津市河芸町一色四〇九　③なし

弘治元年（一五五五）、三井治郎左エ門高次と高治が、江州佐々木四郎高綱の鎮守神である牛頭天王を勧請。明治期に影重の八雲神社を合祀、その後、影重地区へ八雲神社を分祀。毎年七月に奇祭「ざるやぶり神事」執行。

ろ-5

⓭ 椋本神社（むくもと）
①天穂日之命　外八柱　②津市芸濃町椋本三五四　③〇五九－二六五－二二三八

一二〇六年に社を造営、一五七〇年に諸社を合祀して、椋本大明神と称した。明治四十年、椋本地内の十四社を合祀し現在に至る。国指定天然記念物「椋本の大椋」の折れ枝を用いて時の神職が彫製した獅子頭一口がある。

ろ-4

⓮ 明神社（あきら）
①饒速日命　外二十三柱　②津市芸濃町楠原三〇三　③なし

当社は、もと延喜式内志婆加支神社であったといわれる。明治四十五年、林地区を除く旧明村の村社・無格社三十八社を合祀して明神社と単称。

い-4

⓯ 事忌神社（こといみ）
①建速須佐之男命　外七柱　②津市芸濃町林九九〇　③なし

事忌という御名は祭神の御忌みになった事によって名付けた社号。伊勢津彦の神様は女子の月事を忌み給うこと甚だしく女人詣る者なし。社地の東南に「コトガメ」の地名あり。事忌も月事を忌み給うより称えた社名。

い-4

⓰ 安西神社（あんさい）
①建速須佐之男命　外十六柱　②津市芸濃町萩野五一二　③なし

古くは建速須佐之男命を祀る社で須賀神社と称した。明治四十一年、安西地区全域の村社・無格社を須賀神社に合祀し安西神社となる。

ろ-4

⓱ 美濃夜神社（みのや）
①金山毘古神　外二十四柱　②津市芸濃町雲林院一三五〇　③なし

景行天皇三年、初めてこの地に金山彦命を祀ったと『伊勢惣国風土記』と『橋本家文書』に記されている。『延喜式神名帳考証』には、美濃夜は「水之祖」の意であるとして、祭神に彌都波能賣命をあげている。

ろ-3

⓲ 小川内神社（おがわうち）
①天穂日命　外二十柱　②津市芸濃町河内二五五三　③なし

当神社は延喜式内社で、河内の首長祖である天穂日命を主祭神としている。落合から南垣内に至る道に「古社」という地名が残されているが、もとは、この地が鎮座地でいつの頃か現在地に遷座された。

ろ-3

⓳ 辰水神社（たつみず）
①鵜草葺不合尊　外二十四柱　②津市美里町家所一九四一　③〇五九－二七九－三〇一五

当社の前身は辰の口神社と称え、明治四十一年、辰水地区の各神社を合祀し、辰水神社と単称。合祀した神社に美里町内唯一の延喜式内社「船山神社」があり、船山地区の人は今も「式内さん」と呼び親しむ。

は-4

⓴ 長野神社（ながの）
①大日靈貴命　外十五柱　②津市美里町北長野一二二九　③なし

明治四十一年十一月、長野地区に鎮座の三十五祠の御祭神を神明社に合祀。「長野神社」と単称した。安濃國造の祖や長野氏十六代のうち三柱を御祭神とし、境内社「英霊顕彰殿」の御祭神とともに「長野」の守護神である。

は-3

21 高宮神社（たかみや）
①武甕槌命　外十柱　②津市美里町五百野八七三　③なし

鎮座地五百野の地名は、御祭神の景行天皇の皇女五百野久須姫命の名による。皇女は倭姫命の後継の斎王として伊勢に奉仕、都への帰途、この地に没せられたと伝える。二月中に地区氏子により姫宮祭を奉仕する。

は-3

22 比佐豆知菅原神社（ひさづちすがわら）
①菅原道眞公　外十五柱　②津市安濃町草生二四一九　③なし

延喜式内社であり、社伝によると、「元禄十五年（一七〇二）遷宮ノ際、北野天満宮ヲ併祭」した時、当時の村吏であった草生庄八夫妻によって、菅原文章一部及び天神像一体が奉納されている。

ろ-4

23 大市神社（おおいち）
①大市比売命　外二十一柱　②津市安濃町妙法寺八二四　③なし

もと大市氏の氏神で、慶長十六年に建立し、村の氏神として崇敬されてきた。長谷山の麓の山の尾根にあり、社前には安濃川の支流穴倉川が流れ、南方には古墳群もあるなど古代集落やその氏神にふさわしい場所にある。

は-4

24 阿由多神社（あゆた）
①阿由太神　外二十五柱　②津市安濃町安濃一五五六　③なし

延喜式神名帳に搭載の阿由太神社はこの社ではないとする説もあるが、昭和二十七年神社明細帳には、当社の他に同名を名乗る神社はない。拝殿には、「正一位聖天王、正一位奥大明神」に併記した扁額がある。

ろ-4

25 明合神社（あけあい）
①建速須佐之男命　外八柱　②津市安濃町粟加一〇四八　③なし

境内には、昭和天皇に哲学の御進講を勤めた、郷土の篤学紀平正美博士の「天壌無窮」の碑があり、拝殿正面には、昭和三十七年に第十代伊勢神宮大宮司坊城俊良殿一行が参拝され、謹書「明合神社」が掲げられている。

ろ-4

26 伊蔵神社（いぞう）
①伊邪那岐命　外四柱　②津市安濃町粟加一二二五　③なし

社名は、承応年間（一六五二）大旱魃に見舞われた時、安濃地区との水争いが生じ、その際、一身を犠牲にして当区のために水利の便を図った、農民伊蔵の名を後世に残すためにこの社名ができたとの説がある。

ろ-4

一志地区（四十四社）

①御祭神名　②住所　③電話番号

27 香良洲神社（からす）
①稚日女尊　②津市香良洲町三六七五　③〇五九－二九二－三九三〇

稚日女尊は天照大御神の御妹神。欽明天皇の御代。生田より御勧請、祠を造営し祭祀を行い長くこの地に奉斎することとなった。婦人の守護神。紡績界にも信仰が深い。航海の神、海の守りの神としての信仰も非常に厚い。

に-5

28 波氏神社（はで）
①天棚機姫命　外六柱　②松阪市星合町五〇七　③なし

延喜式内社と伝えられる古社。出口延経の「神名帳考証」には「多奈波太姫」とある。「星合神社」とも親称される当神社は七夕の神社としても有名。「勢陽五鈴遺響」によれば、「星の社」と崇敬篤かったとされる。

に-5

29 八雲神社（やくも）
①建速須佐之男命　外二柱　②松阪市笠松町二五〇・二五〇－一　③なし

創建年代は不詳。明治四十一年二月五日、星合の波氏神社に合祀。昭和三年四月、氏子総意により元の社地に分祀、現在に至る。境内社として御本殿の右側には井宮神社、左側には北斗七星社が鎮座する。

に-5

30 綿積神社（わたつみ）
①豊玉彦命　外一柱　②松阪市五主町一一五三　③なし

文化元年九月、五主新田開発の時より産土神として鎮座。嘉永二年、京吉田家に請うて豊玉彦命を勧請。明治四十二年五月、星合の波氏神社に合祀。昭和三年、氏子総意により現在の社地に奉還、現在に至る。

に-5

31 天白神社（てんぱく）
①建速素戔嗚尊　②松阪市曽原町八九〇　③なし

嘉吉三年蘇原城主天花寺越中守源通高が尾張国津島より勧請して之を祀ったが、村民の崇敬厚く天正の頃より須賀神社と称し氏神とした。明治四十一年、十二の神社を合祀して天白神社と単称し曽原の地に建立された。

に-5

32 米ノ庄神社（よねのしょう）
①米ノ庄大御神　②松阪市市場庄町六六七　③なし

昔、建速須佐男命が熊野から尾張の宮へお度りになる折この地に休まれ、「父の大神が必ずここに鎮まりませ」と宣り給う。村社元熊野神社へ地域内の各社を合祀して現在の米ノ庄神社が成立した。

ほ-5

33 黄金塚稲荷神社（こがねづかいなり）
①宇賀魂命　②松阪市上ノ庄町一二二一　③なし

昭和七年一月、集落の繁栄を祈念し伏見稲荷大社の分霊を勧請して現在に至っている。

ほ-5

34 小野江神社（おのえ）
①正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊　②松阪市小野江町二九七　③〇五九八－五六－三〇九

往古、八王子社と称す。明治元年に勝速日神社と改め、明治四十一年には旧小野江村の十二社を合祀して小野江神社と単称した。しかし昭和二十六年それぞれの小字において氏神を祀る志篤く分祀した。

に-5

35 須賀神社（すが）
①建速素盞嗚尊　②松阪市小野江町九六　③なし

当社は、応永八年六月十四日勧請と伝えられ牛頭天王と称したのを、明治元年須賀神社と改名した。明治四十一年小野江神社に合祀されたが、氏子の志し篤く昭和二十六年神社本庁所属神社として小野江神社から分祀した。

に-4

36 手力男神社（たぢからお）
①天之手力男尊　②松阪市甚目町五六二　③なし

当神社は往古、皇大神宮の神戸の神館の所以を以て、社頭を館殿と言い伝え『神鳳抄』に一志郡甚目の御園、甚目御厨などの名残がある。明治四十一年に小野江神社に合祀されたが昭和二十六年小野江神社から分祀した。

に-5

37 龍森神社（たつのもり）
①正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊　②松阪市甚目町四四四　③なし

従五位吉川薩摩守が奉仕し、文久二年の頃までは近隣十二ヶ村の御神楽一行によって祭祀された。明治四十一年小野江神社に合祀されたが昭和二十六年分祀された。この時、八幡神社（通称若宮さん）、宇佐岐神社を合祀した。

ほ-5

38 宇気比神社（うけひ）
①正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊　②松阪市肥留町一〇七　③なし

社伝によれば明応二年正月十五日の勧請である。元日天八王子宮と改称し、明治元年元社号に改める。湯立祈祷修法により、盗難防止と難病平癒に霊験現なり。明治四十一年小野江神社に合祀されたが昭和二十六年分祀された。

に-5

39 須賀神社（すが）
①建速素盞嗚尊　②松阪市舞出町二　③なし

従前は牛頭天王と称していたが明治元年須賀神社と改称。社紋に胡瓜の花を用いており、河童をおそれ尊び祭るためだという。明治四十一年小野江神社に合祀されたが昭和二十六年分祀された。この時に宇氣比神社を合祀した。

に-5

40 八雲神社（やくも）
①建速素盞嗚尊　②松阪市西肥留町一七一　③なし

従前は牛頭天王（ごずてんのう）と称したが、明治元年現社号に改称した。本殿は神明造で手水鉢に寛政七年の銘文と石灯籠に天保十年とある。明治四十一年小野江神社に合祀されたが昭和二十六年分祀された。

に-5

41 中原神社（なかはら）
①豊玉彦命　②松阪市嬉野津屋城町一二九〇－一　③なし

当社は明治四十三年九月二十五日津屋城竜王神社へ竜王神社境内社、須賀田村算所黒野の各神社を合祀の上中原神社と称した。旱魃時に雨乞祈願をし、五坪程の池をさらえた者に米三石、白衣一枚、鍬鎌一丁を与えた。

に-4

42 須加神社（すか）
①道主貴神　外五柱　②松阪市嬉野権現前町四三一　③なし

須加の里の産土神であった須加神社は、延喜式神名帳にも記載された古社である。江戸時代には須加権現と称された。明治四十一年に旧豊田全域（川原木造の八雲神社を除く）の神社が合祀され、数々の神社が祀られる。

に-4

43 小川神社（おがわ）
①高淤加美神　外一柱　②松阪市嬉野中川町六六四　③なし

社伝に昔、丹波谿戸という医師の信仰してきた高淤加美神、大国主命を官帳に載せるに際し、郷名を社号とし村名とした。明治四十年宮古の各社を当社に合祀、明治四十一年には七地区二十九社を合祀して小川神社とした。

に-4

44 天玉神社（あまたま）
①素戔男尊　②松阪市嬉野黒野町一　③なし

神鳳抄に「北黒野御厨（外宮）南北黒野御厨（外宮）八十二丁二石四斗」、大神宮儀式帳に「伊勢国司供進荷前物税一千四百三十七束ノ内一志神戸六束」とあり一志神戸黒野御厨である。昭和二十六年中原神社より分祀。

ほ-4

45 豊地神社（とよち）
①建速須佐之男命　外十一柱　②松阪市嬉野下之庄町一二七五　③なし

明治四十一年一月十六日、旧豊地村内の堀之内・上野・薬王寺・八田・井之上・島田・一志の各神社を下之庄八雲神社に合祀の上、豊地神社と単称。平成十九年一月十六日、百年記念祭で奉祝。

に-4

46 中郷神社（なかさと）
①別雷神　外九柱　②松阪市嬉野宮野町五五三　③なし

当社は、明治四十一年三月、旧中郷村内、釜生田・森本・日川・滝之川・宮野・矢下・合ケ野・岩倉の各神社を宮野の加茂神社に合祀をして中郷神社になった。京都賀茂社の系統と伝えられる。

ほ-4

47 宇氣比神社（うきひ）
①八柱神　外三柱　②松阪市嬉野上小川町一七一四　③なし

当社は旧号八王寺と称し産土神にして往昔より式内神社の由田伝え、明治三年神社取調の節、元津藩神社取調係へ申出たる処証拠無之より八王子又は八柱神則宇気比の条によって宇氣比神社と改称する。

へ-3

48 波氏神社（はて）
①火雷神　外二十五柱　②津市一志町波瀬四二四八　③なし

当神社は主祭神（火雷神）を現今の波氏神社奥社に祭った社で、その起源は明らかでないが、甚だ古くて古来波氏村民の産土神として尊信の厚い延喜式内の社である。

に-3

49 波多神社（はた）
①天水分神　外五柱　②津市一志町八太一一八七　③なし

延喜式内社・郷社。十市皇女が伊勢へ参赴の節、この地に留められ波多神社に参られた際に、万葉集「河の上の」が詠まれた。応神天皇の代、波多八代宿禰一族の氏神として祀られ「龍天宮」「龍天大明神」とも称えられる。

に-4

50 波多神社（はた）
①大日霊命　外十四柱　②津市一志町庄村二五六　③なし

当神社は明治二十三年、神社名を「波多神社」と改称する。改称前は「朝明の神祠」と称し、左に「神明社」右に「天神社」を祀る。

に-4

51 高岡神社（たかおか）
①大日霎貴命　外十六柱　②津市一志町高野九一二　③なし

元は高野神明社と称し、残存の棟札には天正十九年に神殿を造営し遷御を奉仕している。当社は往古より近衛殿と一条殿の祈願所であった。明治に村内の十三社を合祀して高岡神社と称した。

に-4

52 住吉神社（すみよし）
①中筒男命　外十柱　②津市一志町井関一一五〇　③なし

当社は、もと字山本という川辺に鎮座されたが、度々洪水に襲われ、その度に氏子等が防禦に苦労した。そのため、字杉谷の奥へ遷座せられたと伝わる。最古の棟札には「寛永十四年丑八月、其年遷座候也、不詳」とある。

に-4

53 大井神社（おおい）
①豊宇氣比賣神　外十二柱　②津市一志町大仰二〇九　③なし

北畠氏の家臣小泉左近が当地に居住しており、当社の古い境内社熊野神社は、小泉氏の鎮守神であった。この里は豊宇氣大神信仰であったが、これらの神々を村の鎮守神として氏神本社と崇め、祭祀を奉仕することにした。

に-4

54 白山比咩神社（しらやまひめ）
①菊理姫神　外二柱　②津市一志町井生一五九六　③なし

当地区では、昔から菊理姫神を氏神と仰いで、隣村川口地区との村境に鎮座の白山比咩神社を信仰してきたが、その万靈を奉じて川口地区と氏子分離して祀ったといわれる。

に-3

55 坂本神社（さかもと）
①大山咋命　外一柱　②津市一志町石橋二四二・二四三－一　③なし

当地区の人々はもともと、山王社を信仰しており近江国日吉に座す大山咋命を氏神と崇めて勧請したという。明治維新を機に、山王権現社を日吉大社の鎮座地である大津市坂本町に因み坂本神社と改称した。

に-3

56 大三神社（おおみつ）
①天兒屋根命　外七柱　②津市白山町二本木一〇一八　③なし

当二本木地区・三ケ野・岡三地区はもともと小倭の白山比咩神社の氏子であったので、大三村としては村社となる神社はなかった。そのため、神社合祀を予想して急に建立されたのが当社である。

に-3

57 白山比咩神社（しらやまひめ）
①菊理比咩命　外十八柱　②津市白山町川口七一二〇　③なし

鎮徳上人が加賀の白山権現に詣で、帰国の途中瀬戸ヶ淵で休んでいると、笈の中から七羽の白鳥が飛び立ち、七処に羽を休めた内の一つである。主祭神の左右に伊弉諾命、伊弉冉命の二尊を配祀するので「正白山」という。

に-3

58 白山比咩神社（しらやまひめ）
①菊理比売命　外九柱　②津市白山町南出八五一　③なし

古文書によりますと、天文二十二年八幡宮の社僧鎮徳上人が加賀の白山神社のご分霊を勧請され、その帰途に白鳥七羽の奇瑞があり、降りたった所の一つである小倭に祠を建て、奉斎したのが始まりと伝えられている。

に-3

59 八ツ山神社（やつやま）
①菊理比咩命　外十一柱　②津市白山町八対野一四七〇　③なし

当社はもと白山比咩神社と称し、鎮徳上人に係る七羽の白鷺伝説の一か所であると伝えられる。本殿の棟札に、建徳二年と宝永二年とあり、御造営の歴史が伺える。昭和初期に文部省から「大切に保存せよ」との通達あり。

に-3

60 白山比咩神社（しらやまひめ）
①菊理比咩命　外九柱　②津市白山町山田野一八一四　③なし

『勢陽雑記』によれば、家城出身の僧珍徳が加賀の白山権現を載いて郷里の瀬戸ヶ淵にある岩に笈をおろして休憩中、笈から七羽の白鷺が飛び散り、それが降り立った七ヶ所に社祠が建てられたとあり。その一ヶ所が当社である。

に-2

61 家城神社（いえき）
①菊理比咩命　外十二柱　②津市白山町南家城四一四　③〇五九－二六二－四〇一二

白山町の町名由来の七白山の一社。明治四十一年、家城地区の大小祠を合祀し家城神社と単称。創建年は不詳だが、神社所蔵の古神社扉に嘉元二十二年の銘があり、白山信仰が鎌倉時代以前から存していたと考えられる。

に-2

62 宇氣比神社（うきひ）
①天忍穂耳命　外四柱　②津市白山町福田山八〇七　③なし

宇氣比神社の創立は、文禄二年（一五九三）と伝えられるが、天正年間（一五七三～九一）にこの地に住し、のち真見の城主となった北畠国司の家臣福田山帯刀が信仰したともいわれるので、その頃かとも考えられる。

ほ-2

63 竹原神社（たけはら）
①菊理比咩命　外十六柱　②津市美杉町竹原二六九二　③なし

当社はもと白山比咩神社で、加賀国一宮白山比咩神社の御分霊で、第三十六代孝徳天皇の御代の鎮座と伝えられ、鴨長明尭孝法印等の参宮紀行にも記述がある。徳川南龍院頼宣候の尊崇殊に厚く、寄進されている。

ほ-2

64 仲山神社（なかやま）
①金山彦命　外十七柱　②津市美杉町下之川五一九三　③〇五九－二七六－〇三三七

当社は、国司北畠氏の所領で祈願所とした処である。別当所として京都小室の福成寺を建立している。八十二代後鳥羽院の御宇、御神体とあわせて御神像を改造したとして、御神像の裏書「建久九年正月二〇日造立」がある。

ほ-3

65 北畠神社（きたばたけ）
①北畠顕能公　外二柱　②津市美杉町上多気一一四八　③〇五九－二七五－〇六二五

北畠顕能公は南北朝時代、南朝側の後醍醐天皇に仕えた初代の伊勢国司で、その後、九代・約二百四十年間、南伊勢を治めた。氏の末裔により寛永年間に「北畠八幡宮」が祀られ、明治十四年「北畠神社」となる。

へ-2

66 仲山神社（なかやま）
①金山彦命　外九柱　②津市美杉町八知二九七七　③なし

後三条天皇の御代、現在の宮山に神棚大の御舎を造り祀り、岡山美作国一之宮中山神社の分霊を奉斎して、伊勢国司北畠顕能公の祈願所となる。明治四十二年十月、八知地区内の大小祠を合祀して現在に至る。

ほ-2

67 八幡神社（はちまん）
①誉田別尊　外七柱　②津市美杉町奥津一二三八　③なし

伊勢国司・北畠顕能卿の創建で、文和二年、山城国の男山八幡宮より分霊を奉祀。社殿は三社相殿であり、誉田別尊、天児屋根命、大日霎貴命を祀る。後醍醐天皇の崇敬も厚く、長慶天皇も参詣されたとされる。

へ-2

68 若宮八幡神社（わかみやはちまん）
①大鷦鷯尊　外十三柱　②津市美杉町川上三四九八　③なし

履中天皇の御宇（西暦五世紀初）郷民が仁徳天皇と磐之媛皇后の御遺徳を慕い、伊勢平野を見下す修験業山の麓、雲出の川上水源の清地を選んで祠を設けこの二柱の御霊を祀ったのが若宮八幡宮である。

と-2

69 幡須神社（はたす）
①譽田別尊　外五柱　②津市美杉町石名原一七一八　③なし

安政三年（一八五六年）、美杉町奥津の八幡神社より「譽田別尊」を分けて奉斎し、社名を「八幡社」とした。明治四十年、三多気宮ノ下の「須賀神社」ほか、村内十二社祠七祭神を合祀し、社名を「幡須神社」と改称。

へ-2

70 國津神社（くにつ）
①大國主神　外九柱　②津市美杉町太郎生二一四〇　③なし

天文元年八月十六日勧請の神であって出雲大社の御分霊といわれている。社号三社宮と崇奉していたが、明治維新の際、國津神社と改称した。明治四十年に村内七社を、大正十三年に境内社二荒神社を合祀して今に至る。

へ-1

参拝の作法

津地区（三十八社）

①御祭神名　②住所　③電話番号

71 津八幡宮（つはちまんぐう）
①応神天皇　外三柱　②津市藤方二三三九　③〇五九－二二八－三三四二

寛永九年、津藩二代藩主藤堂高次公が千歳山より現在地に神社を遷すとともに藩祖藤堂高虎公を合祀。津の街の鎮守神社として崇敬される。寛永十二年八月、初めて祭儀を斎行する。これが現在の津まつりの起こりとなる。

は-5

72 比佐豆知神社（ひさづち）
①火之迦具土神　外十五柱　②津市鳥居町二〇一　③〇五九－二二五－四六六六

当社は、延喜式内社で社宝として伝わる「高麗狛犬」に記されてある年号に依りますと凡そ一千二百年前から現在の地にお祀りしてあるということになります。

は-5

73 稲荷神社（いなり）
①倉稲魂神　外五柱　②津市新東町塔世三九　③なし

享保時代、安濃津の城主であった藤堂家に、この地の町年寄であった伊藤又五郎が建言し、稲荷神社を創建。この地の繁栄を祈願し家屋を建設、民衆に貸し住まわせ、歳月を経て津藩最初の職人町として益々繁栄した。

は-5

74 高山神社（こうざん）
①藤堂高虎公　外十一柱　②津市丸之内二七－一六　③〇五九－二二五－八五五八

数多の武将に仕えた高虎公は、徳川家康公に起用され関ケ原合戦、大阪冬・夏の陣に数々の武功をたてた。多くの城の設計を手掛けた築城の名手である。当社名は公の謚号「寒松院殿前伊州羽林道賢高山権大僧都」による。

は-5

75 大市神社（おおいち）
①大市比売命　外十三柱　②津市岩田六一二四　③〇五九－二二八－七六一五

鎮座年代不明。現在の鎮座地より北西約四キロの所に大市村あり。その河岸にある大市神社の社が洪水で流出。岩田川の古松にかかる。里人がひきあげ鎮祭。川松社と号す。川松明神と呼ばれ産土神として崇敬される。

は-5

76 小丹神社（おにの）
①埴夜須毘賣命　外四柱　②津市上浜町六－一五六－一　③なし

社伝によると、遠い昔、「景行天皇の御代に勧請す」とあります。延喜式神名帳に「伊勢国安濃郡十座……小丹神社」と記され、郷の鎮守の御社として悠遠久しいところです。

は-5

77 市杵島姫神社（いちきしまひめ）
①市杵島姫命　外七柱　②津市下弁財町津興三三九一　③〇五九－二二八－一四七〇

宗像三女神の一柱、美しい女神として有名。水の神、音楽芸能、金運などでよく知られる。境内の大いちょうは「火防せのご神木」と呼ばれ親しまれている。北畠家の守り神として崇敬されていたことで知られる。

は-5

78 丸山稲荷神社（まるやまいなり）
①宇迦之御魂神　外二柱　②津市大字岩田字丸山二　③なし

文禄元年、富田信濃守知信が津城建築のみぎり、城郭守護・五穀豊穣祈願に稲荷明神を鎮祭。慶長十三年に藤堂高虎公入城後、津城内鎮座の稲荷明神の神霊を此の地に遷す。平成十三年十二月末に社殿建替に際し合祀。

は-5

79 國魂神社（くにたま）
①國狭槌尊　外三十四柱　②津市西古河町三三－一六　③〇五九－二二九－一九二〇

天地造化八柱の神を主祭神とし、かつて八王子社と称し延喜以前創建と伝わる。宝暦九年には後桜町天皇より神階正一位の勅額を賜る。明治末に近在の神社を合祀、國魂神社と改称。本殿東に稲荷社、西に山の神を祀る。

は-5

80 加良比乃神社（からひの）
①御倉板擧神・伊豆能賣神　外十七柱　②津市藤方森目三三五　③なし

倭姫命が天照大御神を奉戴し御廻歴の際、御神託に準じ神殿を建築して鎮座。水利不便なため、片樋宮と称し奉る。四年経て、神託ありて他所に遷座、宮跡に御倉板擧神・伊豆能賣神二柱を鎮座して、加良比乃神社と称す。

は-5

81 谷川神社（たにがわ）
①谷川士清翁　②津市押加部町七－三　③なし

伊勢の国が生んだ二大国学者、本居宣長と並び称される谷川士清を祀る。大正十三年、古世子神社跡地へ創建され、境内には士清の築いた反古塚が残る。神社より徒歩五分の場所に国指定史跡の谷川士清旧宅がある。

は-5

82 高茶屋神社（たかじゃや）
①粟嶋神　外二十二柱　②津市高茶屋一－二九－一七　③なし

病気平癒、特に婦人病を祈願する者多数。毎年一月八日・第二日曜日・十六日に湯立て神事が行なわれ、無病息災を願う。

に-5

83 神館神社（かんたち）
①天照大御神　外一柱　②津市半田一七三三　③〇五九－二二六－一四六二

当社は、垂仁天皇皇女倭姫命・天照大御神を奉じ、五年間この地に鎮座ました。その宮跡に孝謙天皇安濃社を建て、天照大御神を鎮座すとあり。後に神明宮と通称し、天児屋根命・応神天皇を合殿に鎮祭せる。

は-5

84 神戸乃神社（かんべの）
①菅原道真公　外十六柱　②津市神戸一八四四　③〇五九－二二七－四六一九

当社は合祀の神々十七柱を御祭祀するお宮であります。特に神戸の天満宮は、後陽成天皇の御代、各国に一社の天満宮がお鎮まりになった由、記録にあり、又、伊藤博文公より「天満宮」の自筆神額文の寄進を受けております。

は-4

85 殿岡神社（とのおか）
①天児屋根命　外九柱　②津市殿村九五九　③なし

康平年中、伊勢大神宮司従五位下大中臣朝臣宣衡、殿村前司と称して、代々相継いできたが、永暦二年（一〇七八）、宣衡その祖先を祀って殿岡大明神と崇め、里人もその神徳を慕い、爾来九百年の氏神となっている。

は-4

86 置染神社（おきそめ）
①神饒速日命・天照大御神　外四柱　②津市産品四八四　③なし

当社の創祀は、延喜以前であるが、年代は不明である。長谷置染連がその祖先、神饒速日命を祭り、産土神としたのが創祀と伝えられる。

は-4

87 平泉神社（ひらいずみ）
①大穴牟遅命　外八柱　②津市分部一五四一　③なし

創祀は不詳。分部村の城主、分部左京亮殿の氏神であった。盛衰を経て、明治四十年、野図神社など六社を合祀し、現在に至る。

は-4

88 宇気比神社（うきひ）
①八柱神　外六柱　②津市小舟五〇二　③なし

もと、八王子という小字に奉斎していたが、寛文年中（一六六一～七三）に当地へ奉遷したという。明治四十年に須賀神社など五社を合祀し、明治四十四年稲荷神社を合祀した。

は-4

89 石積神社（いしだて）
①大山祇神・国之常立命　外十五柱　②津市河辺町一三一六　③なし

創祀は不詳であるが、神代よりここに存したと伝える。又、中興されたのは天命開別天皇淡海國滋賀宮に天下を治められた時に伊勢国に旱魃甚だしきことあり、これを契機として勧請なされたと伝える。

は-4

90 結城神社（ゆうき）
①結城宗広・結城親光以下殉難戦没将士　外　②津市藤方二三四一　③〇五九－二二八－四八〇六

後醍醐天皇を奉じ建武新政の樹立に貢献した結城宗広公を祀る神社。公は当地で没し、墓には塚の上に六体地蔵が置かれ、結城塚と呼ばれた。一八二四年、津藩の藩主藤堂高兌により社殿が造営されてより結城神社となる。

は-5

91 三重縣護國神社（みえけんごこく）
①禁門の変・戊辰戦争から大東亜戦争までの三重県にゆかりある御英霊六万三百余柱　②津市広明町三八七　③〇五九－二二六－二五五九

明治二年、津藩主藤堂高猷公が津八幡宮に小祠を建て、戊辰の役で戦死した藩士の御霊を祀り、「表忠社」と称したのが始まり。明治四十二年に現在地に御遷座し、昭和十四年に現在の社名「三重縣護國神社」となる。

は-5

92 須賀神社（すが）
①建速須佐之男命　外二柱　②津市垂水字上屋敷一四七　③なし

当社の勧請年月日は不詳。明治四十四年加良比乃神社へ合祀、昭和二十五年加良比乃神社炎上の厄を契機に氏子一同逢い謀り元の須賀神社の御祭神を分祀して須賀神社として独立、昭和二十六年正式に神社を設立した。

は-5

93 雲出神社（くもず）
①大国御魂神　外二十四柱　②津市雲出本郷町二二一　③なし

創祀については口伝等もなく不詳である。古くは元八王子宮と称したが明治三年國玉神社と改称し、明治三十九年神社合祀が時の内閣より敢行されると、明治四十二年に近隣の蛭子神社など十一社を合祀し雲出神社と称す。

に-5

94 一御田神社（いちみた）
①高御産巣日神・神産巣日神　外十二柱　②津市一身田町六七九　③なし

往古より続く御田植祭は毎年五月に催行され、御田植歌の歌詞からも神宮との深い関係を伺い知ることが出来る。拝殿前に田を造り神職が歌を奉唱する中、早乙女が松葉を苗に見立てて植栽し地域の豊作と平和を祈願する。

ろ-5

95 大乃己所神社（おおのこそ）
①大物主神　外十一柱　②津市一身田大古曽一七三九　③なし

創立年月日は不詳であるが天慶五年（九四二）の大神主大乃己所重久の記した縁起書（写）に大物主神御鎮座を記してある。また、鬼退治（大物主神勧請）の伝説等もあり天慶以前の創立と伝える。

ろ-4

96 八幡神社（はちまん）
①譽田別尊　外三柱　②津市一身田豊野一〇五一　③なし

創立年月日は不詳。熊野神社と通称され、元豊野の鎮座であったが、明治四十一年に大乃己所神社に合祀された。その後、昭和二十六年に至り、氏子の総意によって大乃己所神社から分祀され元の社地に祀られ現在に至る。

ろ-5

97 宇氣比神社（うけひ）
①市寸島比売命　外五柱　②津市一身田豊野一二〇一－一　③なし

創立年月日不詳。元豊野の鎮座であったが、明治四十一年に大乃己所神社に合祀された。その後、昭和二十六年に氏子の総意によって大乃己所神社から分祀され、元の社地に祀られ現在に至る。

ろ-5

98 大乃己所神社（おおのこそ）
①譽田別命　外七柱　②津市一身田中野六九四　③なし

天應元年（七八一）酉年八月十一日鎮座との申し伝えがある。当社は往昔より七社大明神と称えられ、見初大明神の神殿に八王子、稲荷、八幡、春日、神明、大梵天王七座神を奉祀して尊崇を得た。

は-5

99 逆川神社（さかがわ）
①伊邪那美命　外十柱　②津市栗真小川町二七五　③なし

詳細不詳。伊勢街道に面する。逆川の由来は、周辺の小川が地形の関係で山向きに流れていたことによる。例祭日は毎年夏の土用の丑の日で、社頭には牛の座像（石像）が置かれている。境内北東には大池（弁天池）あり。

ろ-5

100 千王神社（せんのう）
①神倭伊波礼毘古命（神武天皇）　外七柱　②津市栗真町屋町九四六　③なし

創立不詳であるが持統天皇の伊勢行幸の際に田地を賜り慶長六年（一六〇一）に社領一石を領主より寄進されたと伝わる。明治四十一年に境内社を合祀。七月には夏祭りに併せ町屋百人衆による「龍踊り」が奉納される。

は-5

101 八雲神社（やくも）
①須佐之男命　外十六柱　②津市白塚町四五五八　③〇五九－二三二－一五〇一

創立年月不詳。例祭日（七月十一日）夜、悪疫退散などを願う特殊神事「やぶねり」斎行。また毎年初午の日を中心に厄祓いの獅子舞神事が町内で行われる。いずれも江戸時代から続く神事で、両者とも津市無形文化財に指定。

ろ-5

102 八乳合神社（やちあい）
①少彦名命　外八柱　②津市片田井戸町二〇〇－一　③なし

旧片田村に古くから鎮座していた九社を、明治政府が出した勅命「神社合祀政策」により明治四十一年、井戸町の中山神社に合祀し、無格社・小祠二十四社をも併せ祀り、新しい社殿を設け八乳合神社と改称した。

は-4

103 多為神社（たい）
①天之穂日命　外十八柱　②津市大里睦合町一五一五　③なし

延喜式神名帳にその名があり、正天神社又は天満宮八王子両社と称された時代もあったが、明治になり現社名に復した。明治二年三月、明治天皇が神宮に御参拝の御途次には、特に代拝を差遣された由緒ある神社である。

ろ-5

104 石積神社（いしづみ）
①大山祇神　外六柱　②津市大里窪田町一五〇一　③なし

織田信長の戦乱により、神霊を伊勢神宮に遷らせ給うた時に、山田地方に暴風が頻発。そこで神宣を伺いしむるに、これ石積神の祟りなりとあり。神霊を鈴鹿の山続きで南に溜池、北に里ある所の当社の旧社地に奉遷した。

ろ-4

105 須賀神社（すが）
①須佐之男命　②津市大里山室町三七五　③なし

明治四十一年に八王子社・若宮八幡神社・明神神社・天王神社（天王二座）・愛宕神社が合祀され須賀神社と改称し現在に至る。平成十三年、神殿と拝殿を造営した。山の神も境内に祀られる。

ろ-5

106 須賀神社（すが）
①須佐之男命　外十九柱　②津市高野尾町三五四六－二　③なし

蔵の棟札に「奉造立大梵天皇大永七年丁亥霜月十日」とあり、当神社山麓の長泉寺に蔵する古記録にも同様記述あり。即ち当神社は大永七年に御遷座ありしものであると考えられる。

ろ-4

107 塩釜神社（しおがま）
①鹽土老翁神　外三柱　②津市雲出伊倉津町九九三　③〇五九－二三四－四三六六

安産・長寿・海上安全などでよく知られる。とりわけ安産守護の御神徳は有名。昭和六十二年六月十五日、宮城県塩釜市鹽竈神社の御分霊を受け祀っている。

に-5

108 八柱神社（やはしら）
①天穂日命　外二柱　②津市一身田豊野一二七七　③なし

創立年月日は不詳。当社は元豊野の鎮座であったが明治四十一年に大古曽の大乃己所神社へ合祀されたが、昭和二十六年氏子の総意により、社殿等境内設備を整え大乃己所神社より分祀し元の社地に設立した。

ろ-5

久居地区（七社）

①御祭神名　②住所　③電話番号

109 川併神社（かわい）
①五男三女神　外三柱　②津市久居元町一〇九九　③〇五九－二五六－二六九八

平安時代中期の「延喜式神名帳」に列せられている式内社である。久居藩設置以前から当時の村域の氏神であった事が知られ、明治六年には村社に列せられ、同四十四年には各支郷の神社を合祀して現在に至っている。

に-4

110 敏太神社（とした）
①彦火火出見命　外一柱　②津市戸木町四三二六　③〇五九－二五五－三六一八

当敏太神社は、皇祖彦火火出見命とその后であられる豊玉姫命を祀る由緒深い社であり、神武天皇以前より祀られ今日に至るまで二千有余年の長い間、氏子の皆様方を初め敬慕される方々の厚い信仰の的となっている。

に-4

111 七栗神社（ななくり）
①品陀和気命　外九柱　②津市庄田町一八一　③〇五九－二五二－一〇二四

人皇四十五代聖武天皇の御宇奈良朝神亀元年（七二四）豊前国九州の宇佐の宮より勧請した古い八幡宮。寛正三年他の六棟札は津市指定文化財。明治四十一年三月合祀令により七栗地区各字の二十五社を七栗神社に合祀された。

に-4

112 稲葉神社（いなば）
①大年命　外六柱　②津市稲葉町四六二　③〇五九－二五二－〇三五九

延暦二十年（八〇一）頃創立。延喜式神名帳「式内稲葉神社」氏子地域の稲葉は、元多野田村蝿田村を合せ、村の産土神として鎮座の二座並殿の神社である。社の後ろに大石があり、土地では「懸税の御霊石」と称す。

は-4

113 射山神社（いやま）
①大己貴命　外十八柱　②津市榊原町五〇七三　③〇五九－二五二－一〇二四

古には都人がこの地で身を清めるために湯垢離をして、伊勢に参拝していた。安土桃山時代、湯治場である榊原温泉の「温泉大明神」として祀られ、近年は境内の大黒様の「恋こ槌」が良縁を求める参拝者で賑わっている。

は-3

114 物部神社（もののべ）
①宇麻志麻遅命　外二十三柱　②津市新家町五六三　③なし

当社は、往昔より山辺の行宮式内物部神社と呼ばれ崇敬されていた。神殿内には二座祀られてあった。建速須佐之男命、物部連公・新家連公その祖先の宇麻志麻遅命を相殿に祭祀したのである。また村名も同様に起因する。

に-4

115 木造神社（こつくり）
①品陀和氣尊　外十二柱　②津市木造町八九四　③〇五九－二五六－二六九八

明治四十四年八月「一村一社制度」により初代木造城城主木造顕俊が、明徳三年（一三九二）に「石清水八幡宮」を勧請した「八幡宮」他、村内の六社が合祀され地域の氏神として現在に至っている。

に-5

手水の作法